

ハロウィンとかぼちゃポターージュ

巫夏希

かぼちゃが余っちゃって——そう言った彼女は僕に段ボール一箱分のかぼちゃを差し出した。結局の所、穴を空けているところを見るとどうやらハロウィンに使ったらしいけれど、後処理までは考えていなかったらしい。ま、別に良いけれど。

全部使っちゃって良いのかい？ と質問すると、少し分けてあげるから、とだけ言った。調理だけを頼んだ、ということか。別に構わないけれど、それは態度としていかほどなものか。

まあ、彼女は小学校の教師として毎日疲れているし、そのくらい彼氏である僕が何とかやつ

てあげることも……役目としては上々か。

もってきたかぼちゃを早速切り分ける。そうしてワタと種をしっかりとスプーンで取り除く。

ここできちんと一手間加えておかないと、面倒だからね。

そういえばほかに野菜つて無いかな？

僕の言葉に、彼女は頷く。

一通りの野菜なら、学校の野菜庭園にあるから使つて良い、とのことらしい。それつて他の教師に許可を得ているのか？ と聞いたところ、食育の一環だから問題ないとのことだった。だったら別に構わないけれど。

それじゃ、タマネギを使うことにしよう。

彼女に用意して貰ったタマネギ——言うまでも無いが、これも学校の野菜庭園から確保したものだ——をみじん切りにしていく。

タマネギのみじん切りといえは、目にしみて

涙が出る——なんてこともあるけれど、そんなこと知ったことでは無い。いや、別に悪気があるわけではない、ただ単純に、僕がメガネをかけているからそこに關しては問題無いと言う話だ。

ちなみに彼女は僕がタマネギを取り出した段階で警戒していたようで、水泳用のゴーグルを取り付けている。準備の良いことで。

野菜の下準備を済ませたところで鍋に火を掛ける。そして暖まった段階でバターをひとかけら投入する。バターを溶かしつつ、僕は要領よくタマネギを炒めていった。

そういえば、ジャック・オー・ランタンについてもカブを使っていたんだっけ。そんなことを彼女が不意に言い出した。片手にはスマートフォン。大方調べてそう言ったのだろうけれど、なぜこのタイミングで言い出したのかが気になる。別に關係の無い話だと思いうけれど。強いて言

えば、それを言うのは僕じゃ無くて、君が担当しているクラスの生徒に言うべき話題じゃないか？

そんなことを考えていたらタマネギがしんなりとしてきた。火が通ってきた証拠だ。そうして僕はかぼちゃを鍋に投入していく。さっと炒めたら水とコンソメを加えて蓋を閉めて一煮立ち。

給食までには間に合うでしょうね？ との彼女の問いに僕は時計を見る。今は十一時を少し回った辺り。まあ、何も問題が無ければ間に合うと思いうけれど。

そういう感じのことをすべてひっくるめて僕は領くと、安心したようにほっと溜息を吐く彼女。よほど時間を気にしていたらしい。だったら給食のおばちゃんにでも頼めば良いのに。逆にそちらのほうが衛生的な気がするけれど。

追加料金払わないといけないからさ、と彼女

はスマートフォンを見つめながら僕の呟きにそう答えた。それはそうかもしれないけれど、それでオーケーを出す学校もどうかと思う。一応仕事にしているとはいえ、これは完全に奉仕活動だけ？

さて、そんなことを考えていたらかぼちゃが良い感じに煮立ってきた。鍋の蓋を開けると、かぼちゃの甘い香りが室内に立ちこめる。素早く灰汁をとると、弱火にして蓋を閉める。

ここでようやく休憩。僕は一度手を洗い、近くにあったパイプ椅子に腰掛けて、スマートフォンのタイマーアプリを起動する。

時間の設定は十五分。ま、ソシャゲのクエスト一個分でもクリアすればちょうど良いくらいかな。そう思って僕は待ち受け画面のアプリをタップした。

イベントクエストをクリアして、勇者というよりかは女戦士のコスプレをしているエリザンとかを仲間にしたところで、ちょうどタイマーが鳴り響いた。

手を洗い鍋の蓋を開けて、用意しておいた竹串でかぼちゃを刺す。すうっと竹串が抵抗なく通ったので、火が通ったことが分かる。

火を止めて、家からもってきた泡立て器を取り出す。そうしてかぼちゃを容赦なく潰していく。この行程が大事なのだ。いかにかぼちゃをなめらかにさせていくか。そのためにかぼちゃを柔らかくするまで煮詰めたのだから。

原型を止めていないくらい潰したところで、牛乳を投入する。これがクリーミーな味わいを生むので、入れないとね。まあ、入れなくてもいいけれど、かぼちゃって案外子供が嫌いな野菜

に入っていることもあるので、その辺りは注意しておかないと。『食育』を銘打っているならば、そこらへんも注意している。

牛乳を入れて混ぜて、火を掛ける。そうしてある程度煮立つか煮立たないかくらいのところまで塩こしょうを少々。味見をすると……うん、ちょうど良い味付けだ。かぼちゃの甘味が残っていて、かつ牛乳によるクリーミーな味付け、そうして、それらを引き立てるような塩こしょう。我ながら完璧にマッチングしている。

出来たよ、と僕は彼女に声を掛ける。彼女は仕事の中にもかかわらず寝息を立てていた。まあ、学校の先生という職業は大変だからね。一緒に暮らしている僕が身をもって実感しているから、そこは厳しく言わないほうがいい。

一杯分掬って、ポタージュを器に盛り付ける。そうしてそれを彼女に差し出した。

彼女はありがと、と言って受け取ると、スプーンも使わずにそのまま器に口づけて傾けていく。いくら僕しかいないからって女性なんだからそのあたりの身だしなみはしてほしいところだけれど……まあ、いいか。別にとやかく気にして欲しい僕でも無い。

一気に飲み干してしまったのか、次に器を見たときはその中身が空になっていた。そして、器に隠れていた彼女の子供のように無垢な笑顔が見えてきた。

美味しいよ！ 美味しい！

彼女は僕にそう言って、うんうんと頷く。

やっぱり君の笑顔は可愛いなあ。

僕はそんなことを思いながら、ポタージュの入った鍋の蓋を閉じるのだった。

終わり